

追悼の詞

東 隆眞

故黒田嘉様 法名安徳院殿嘉祥妙慶禪尼様は、明治三十六年六月一日長野県須坂市でお生れになり、平成四年一月三十一日行年九十歳为天寿を全うしてご逝去になりました。あなた様は大正九年長野高等女学校(現長野西高等学校)をご卒業のうえ、大正十三年女子美術学校(現女子美術大学)をご卒業になり、その翌年大正十四年、栃木県大田原市光真寺第三十六世黒田白純老師とご結婚になりました。

以来、一代の傑僧白純老師のよき理解者として、またよきパートナーとして、火災のため焼失した光真寺の復興に専心努力して、栃木県、関東有数の大寺院として見事に発展させ今日の大に導いたのをはじめとして、昭和二十四年の栃木県西那須町の那須寺の開創、昭和三十年の東京都品川区の桐ヶ谷寺の開創、昭和三十九年の学校法人ひかり幼稚園の創設、昭和四十四年の当善光寺の開創、昭和四十五年の米国ロスアンゼルス仏真寺の開創、平成三年の静岡県不二寺の開創等々にあたっては、直接間接に有形無形物心両面にわたる絶大なる御力を傾注されたのでした。

また八名の男子をもうけ、ことごとく仏縁を結ばせ、このうち四

名すなわち光真寺俊雄老師、仏真寺博雄老師、善光寺武志老師、桐ケ谷寺純夫老師は、それぞれ末寺末山を更に新しく創設し、一か寺を新基建立するなど、常識を超えた大きな力を發揮して、国内はもちろん海外にいたるまで、もつとも活発な宗教活動を展開しております。

その性まことに温和、しかも忍耐力強く、白純老師と協力して寺門の興隆、檀信徒の教化に力を尽し、数多くの男子にことごとく大學教育を受けさせ、決してめだつことなく、仏法の信心につらぬかれたご一生は、仏教者、人間の鑑と申しあげても決して過言ではございません。

それにしても、あの小さなおからだのどこに、天地をゆるがすほどのバイタリテイがひそんでいたのでしょうか。

仏法のために生れ、仏法のために生きぬかれた九十年のご生涯は、いま、確実に世界人類の平和としあわせのために花開き、真実を結ぼうとしております。私どもは、安徳院殿嘉祥妙慶禪尼様のご精神を体して、微力ながら精励することを、ここにあらためて、お誓い申しあげて、弔辞に代えさせていただきます。

平成四年二月八日

株式会社

ナリス化粧品

社長 村岡有尚

本日茲に故黒田嘉刀自 御戒名安徳院殿嘉祥 妙慶禪尼様の御供養がおこなわるるに当り、株式会社ナリス化粧品並に社員一同を表して御霊前に合掌低頭謹んで哀悼の誠を捧げます。私は御子息横浜善光寺住職黒田武志様に御縁をいただきましてより時折拝眉の機会を得まして、その都度御慈愛に溢れたお諭を賜わり、今日に及んでおります。

昨年中ごろよりご健康を損われ、爾来御療養専一にお過しの結果、一進一退の御病状の中にも一時は快方に向われたやにお聞きしておりましたが、今突然の訃報に接し、あまりにもにわかなお別れとなり全く信じられません。

しかし翻つて思えば、白純大和尚様の御命日までと懸命に頑張つてこられたものと、その御心中を察し致します時、白純大和尚様へ、最期の最期までお尽しなさるそのお姿は、誠に尊いきわみであります。本当に有難うございました。本当におつかれさまでした。

安徳院殿嘉祥妙慶禪尼様、あなた様が九十年の御生涯において培われた御精神と御遺徳は六人の御子息、方丈様方をはじめ、大勢のお弟子さん方お檀家の皆様方に引き継がれ、尊い菩薩行の原動力となつて不滅の光彩を添えるものと信じます。

大阪府高槻市
東郷 敏

安徳院殿嘉祥妙慶禪尼様、どうぞ安らかにお眠りくだされ、いつまでも、いつまでも私どもをお護りくださいますようお願い致します。

ここに謹んでお別れの言葉といたします。

平成四年二月八日

私はお母さまと申し上げます。

親しみと想い出と懐しみばかりが去来致します。方丈さまから、お母さまの御具合いが思わしくないと聞かされ案じておりました。つい先日おかくろも「母は大丈夫ですキット大丈夫です。必らず回復いたします」子としてのご信念から祈る様に、願う様に、届く様に申された方丈さまのお言葉。安易に信じてしまったことは 迂闊でした。自分の忙しさにかまけて御見舞いも先送りしてしまつた私。ほんとうに御免んなさい。いまはなんとも申し訳けもなく唯々胸の痛みを覚えます。

白純和尚さまをして最もご信仰あつく生仏けと称せられたお母さまのこと、必らず御仏さまの大なる御加護もあろうかと永遠のいのちに期待し、また新しい春を御迎えいただくこと、信じておりまし

た。そして願わくば一日も早いご快復をと、御祈り申し上げておりました矢先。方丈さまから突然の悲しみを知らされ愕然と致しました。

お母さまはキット天なる御仏さまに救われて守られて召されて白純大々和尚さまのみもとに逝かれたことと思います。

思ひ出は尽きません。お母さまにはじめてお目にかかりましたのは、善光寺の山が開かれて間もなく、方丈さまと倫子さまのご結婚式が挙げられましたその時でした。

白純大和尚さまは、都度に「嘉子が、よし子が」と仰せられるし、方丈さまは「母が、おふくろに」とはやくから影武者のような存在を、よく承知しておりました。

何もかも大の男達がよりかかってしまっている存在。屈強な男児七名、立派な御子達に恵まれこの世に送り出したお母さまでありますから大きく頑丈で果敢な御方ばかりと想像しておりました。

時にお母さまは胸に両手を合わせて男児の中に囲まれてそれはあまりに小さく、まあーるく、低くやさしく、おおらかな御姿に思わず、はっと胸に声つもらせたこと忘れることができません。以来ご立派なお母さまに 私も親しくお話をさせていただくことが出来大

きな感化を受けることになりました。

白純和尚さまや御子達がそれこそ命を賭けて世のため人のために、寺づくりや人づくりの、表舞台でご活躍なさっている間、御台所用人としてのお母さま。「やりくり」の御苦労は人知れずしてとても語り尽せるものでない事、察するに余りあります。

黒田家の暦の中に、悪しき日は一日もなし。どんな辛くとも、苦しくとも今日一日の辛捧。と、みんなの為に尽しても尽しても尚、尚足りぬ御氣持で尽され躬自ら身を以って行じてくださった。お母さま。篤く敬して違わぬ、偉大な母像が観じられてなりません。

かっってお母さまが子育ての頃の御述懐に、わたくしが手を合わせ拝んでいるとこの子達は、いっこうに手を合わせようともせずそれを見て笑っておりました。云うても見せても聞かせても手を合わせようとはしなかった子供たち。でもそれがいまどうでしょう。朝日ののぼるのをみて、この子達は一生懸命手を合わせ拝んでいるではありませんか。なんと素直でありがたいことか、まことにうれしいことです。和尚さまと手をとり合ってよろこび泣けてしまいました。と、お話くださるお母さまには、安らぎと安堵の色が眸中に溢れ、正にははなる生仏さま、涙ながらに御話くださったことがきのうの

様に鮮明でございます。

東を向いては親さまを拝み、南を向いては諸師を拝み、西を向いては夫や子達を拝み、北を向いては衆生と御世話してくださった方々を拝み、上を向いては御神佛を拝み、下を向いてはお仕えくださる方々を拝む。

目に見えぬ御佛の心を通うこそ、この拝みこそ人のまことであり感謝のすべであり、人の尊さであると活々と教えてくださいましたお母さま。

いつも両手を合わせ、両手でささえ、両手ににぎり、両手の愛をいっぱいくださった成寿山善光寺のお母さま。本當にありがとうございます。

永遠の御別れになりますがお母さまの御恩身に泌みて忘れるものではございません。

以上尽きぬ名残りを惜しみながら。

平成四年二月八日

お悔みのお便り

東京都

中村 元

貴誌『成寿』春期号をなにげなく拝見しておりましたところ、御挨拶を拝見しまして驚ろきました。

承りますと、御尊母様には一月三十一日に御逝去されました由、何とも申し上げることばもございません。少しも存じませんで、お悔みも申し上げませんんでして相済まず存じます。

尊師はじめ御皆さまの御清祥を御覧になられました上でのことでありまして、御尊母さまには御心残りも無きことと存じますが、御一統さまにはさぞかし御愁傷の御事と拝察致しここに謹しんでお悔み申し上げ、御冥福を祈り上げます。

御皆さま御悲嘆のあまりお疲れが出ませんように、くれぐれも御大事に願います。 合掌

二月二十四日

横浜市

高野 義郎

御母堂様御逝去と伺い心からお悔み申し上げます。小生も昨年母を失いました。お寂しくなられたこと存じます。御母堂様には生前きつと貴方の御活躍をお喜びになっていたことでしょう。お疲れ

の出ませぬようお体おいと下さい。

二月一七日

横浜市

伏見 暁

ご母堂様のお逝去深くお悔み申し上げます。

善光寺さんで方丈さんと一緒に働いていたあの頃、お母さんにお会いする度びながしかのおこずかいを戴いた当時のあの笑顔御温顔を思いだし、涙しきり止むあたわず。

何時の日か別れる事と知りながら、(尽くしても尽くしてもたりなかつたなア、母の恩) どうしても下の句ができませんでした。お体をたいせつに。

二月一八日

東京都

奈良 政子

御母上様御遷化の御事、「成寿」で拝見いたしびつきました。立派なお子様方を大勢育てられ大役を果しておの旅立ちは見事というほかはありません。私共凡人にはとうてい出来ることではございません。心から御冥福をお祈り致します。

何卒御身ご大切にますますの発展と御活躍を念じ上げます。

二月二十日

横浜市

石原 孝哉

この度 新井誠心氏より御母堂様ご逝去の知らせを受け驚いてお
ります。

昨年末、荒井氏より具合が良くないことは知らされてはおりまし
たが、まさかこんなに早く訃報に接するとは思いませんでした。同
じように老いた母を持つ身として、方丈様のお悲しみは痛いほど分
かります。

どうかお心落なさらぬよう心よりお祈り申し上げます。

本来ならばご霊前に向いて香など献げさせていただくべきです
が、学年末の多忙な時期ゆえ手紙にて失礼させていただきます。

二月二十四日

大阪府松原市

佐田 依枝

御母上様御逝去遊ばされました由伺い驚いております。何も存じ
ませず本当に申訳ございません。

八十九歳の御高齢まで御長寿遊ばされ、善光寺の益々の御隆昌を御
覧になられ、どんなにかお喜びだったことかと拝察申上げておりま
す。

皆様も親孝行でいらっしやいます由姉よりも伺っております。御
力落しでございますようが充分の御供養なされま様心より御冥福を

お祈り申し上げます。

先づは遅ればせながら謹んで御悔み申し上げます。

二月二十六日

川崎市

長棟 梅峰

此の度 御母堂様逝去と洩れ承り、ご心中いかばかりかとお悔やみ申しあげます。

しかしながら、九十の齢を閲された長い年月の間、方丈様が七面八臂の転法輪に活躍されるお姿を眼の当りにされ、心安らかに大往生をお遂げになられたことと推察申しあげます。

さりとて、諸行無常とは言いながら、何時何時までも長生きを希うのが人の常であります。御母堂様との永久の別離にご愁傷の一事を深くお察し申しあげ、早速ご弔問に参上いたすべきところでございますが、遅ればせながら、略儀ながらお悔やみ申しあげ、心から御冥福をお祈り申し上げます。

三月四日

千葉県成東町

岩井 文子

此の度は御丁寧に御供養の御品を頂戴いたしまして、恐縮に存じております。鎌倉彫りの立派なお盆、御母堂様の想い出に大切に使

わけて頂きます。

略歴を拝見しまして御立派な御母堂様で、おしい方を亡くされた
と、もう少し長生きなさってもっと御話をさせて頂きたかったとし
みじみ思います。主人の母も私の母も明治三十六年生まれでござい
ますので、丁度十歳ちがいでございます。母を亡くした時のように
悲しい事でございます。

お彼岸には伺わせて頂きたいと思っております。御丁寧に恐れ入
りました。

二月二十四日